

に成功した賀川玄悦（一七〇〇—一七七七）を、阿波藩医として召しかかえた結果、阿波賀川流産科の名を高からしめた。

そして、明和二年（一七六五）玄悦が著わした名著『産論』（科学的な意味の最初の日本産科学教科書）を、文政八年（一八二五）有名な蘭館医シーボルトが、欧州医学界に紹介したが、そのオランダ語訳をした美馬順三は阿波藩士であった。

明治医制（明治七年、一八七四）示達にはじまり、明治二十八年第八帝国議会（一八九五）において、医師免許規則改正案がわずか二十七票の差をもって否決せられた結果、以後漢方を医師開業試験科目に加えることは認められずして現在に至っている。

この明治前期二十年ほどの期間に、漢方医たちが興した漢方医存続運動展開の歴史は、実に一種の漢方医学の受難史とも考えられる。

元阿波藩医井上肇堂（一八〇四—一八八一）は、四国における漢方医存続運動の中心となり、明治十一、二年頃から県下在住四百名に近い漢方医家を結集して医師職業集団を興し、これを済生舎と名付け（医師会のルーツ）、自らその社長に就任した。

明治十三年（一八八〇）一月十八日、漢方医療の普及と研修を目的として、済生社員二百余名の合資によって、私立徳島済生舎医院（病院とも称した）を徳島市に開設した。この本院開設にあたって肇堂は金二百円を寄付し、書籍機械類を無償で貸与し、更に一年間無給で奉仕したという。

この病院は、肇堂の指導と経営の妙を得て、患者は蜚集し、漢方研修の医学生も多数勤務し、盛大に発展しつつあったが、惜しくも明治十四年（一八八一）四月二十三日肇堂の逝去によって、病院事業は急速に衰退して、遂に廃止となり、四国における漢方医存続運動は自然に消滅してしまつた。

徳島市の中央にある眉山の山麓の寺町に潮音寺があるが、その墓所の無縁墓地に洋学者（蘭・英両国語に通じ会話もできた）であり、高名な医師でもあった井出三洋（一八三四—一九〇八）の墓石があることを発見し、その不遇な生涯に就いて詳述しておられる。

また、寺町の本行寺の近くで、洋学者兼初代衛生課長として防疫関係で活躍した興津春機（一八三四—一九〇二）の墓石が、横になつて放置されているのを見出され、その功績に就いて記述された。

逸話の多くは、各地と関連しているので、他府県の医史学研究者にも、参考にして頂ける点が少なくない、と思う。

（片岡 義雄）

〔徳島出版、徳島市幸町一—六、電話〇八八六一—二一九三二、平成四年十月刊、A五判、三四〇頁、三〇〇〇円〕

三浦豊彦著『労働と健康の歴史』（第七巻）

『労働と健康の歴史』第一巻が刊行されたのは、一九七八年（昭和五十二年）で、爾後二巻、三巻……と続き、第七巻の刊

行は、一九九二年(平成四年)であった。十四年間に渉る労作に、あらためて著者のその道における研鑽の真髄を見るの思いである。

その各巻にはそれぞれ「古代から幕末まで」「明治初年から工場法実施まで」「倉敷労研の創立から昭和へ」「十五年戦争下の労働と健康」「労働と健康の戦後史」「労働衛生通史・他」という副題が付されており、内容のあらましが推測される。そして、ここに紹介させていただく第七巻は、労働と健康の歴史という大きな流れを、時代を追ってみてきた中で暫し歩を止めて、その中での重要な事項に焦点を当て、論旨を深めたものと言えよう。題して「古典的金属中毒と粉塵の健康影響の歴史」。

その内容を盛り上げている資料は実に豊富で、しかも具体的事例が記されているものが多く、ややもすると、著者自らが手がけて来られた調査であるかのような錯覚に陥ってしまう。過去の資料でも一たび著者の手にかかると新たな血が通い始めるのであろうか。研鑽のほどが窺われる。

さて、日本ではもう過去の問題に近くなったと思いたい鉛、水銀、砒素、黄燐などによる中毒、粉塵の健康問題ではあるが、しかしこれから相互に関係を深めてゆかねばならない発展途上国では、関連する問題はまだまだ多いという実態を見聞している。その意味からは本書に記されている事は現実の問題でもあろう。

その構成は、第一章 鉛中毒の歴史(古代ローマの水道と鉛

中毒、古代・中世の鉛中毒、十六世紀以降の鉛中毒、鉛銃弾と初期蓄電池工場の鉛中毒)、第二章 水銀中毒の歴史(古代の水銀中毒、水銀を取扱う昔の職場と水銀中毒、戦後の水銀環境)、第三章 砒素中毒の歴史(中国の霊薬と砒素、古代中国における砒素の精製、『デ・レ・メタリカ』と砒素、ニュートン、シェーレ、ナポレオンと砒素、宋應星の『天工開物』と砒素そして石見銀山、十九世紀の砒素中毒、職業病としての砒素中毒、日本の第二次大戦前後の職場の砒素中毒、公害としての砒素、半導体製造とアルシン)、第四章 黄燐中毒の歴史(燐の発見、黄燐マッチ、第二次大戦後の黄燐による顎骨壊死、黄燐の許容濃度)、第五章 生野鉱山の塵肺の歴史(大葛金山金掘病體書のこと、徳川時代の生野銀山の煙毒、幕末・明治初年の生野銀山、生野鉱山鉱夫共済組合、大正時代の生野鉱山のヨロケ病、昭和時代の生野鉱山の塵肺)、第六章 石綿の健康影響の歴史(火洗布考、石綿肺・肺癌)、以上少し紙数をとり過ぎたが、内容に特異な点も多いと思われたので記してみた。

私は永らく労働科学研究所図書館の仕事に携わって来たので、各時点で受け入れられた図書、資料や、いつどのような経過で、と思われるような古い時代の資料など、頭のどこかに印象づけられているものもあった。特に古いものについては、利用者あつて始めて知り、教えられるものが少なくなかった。この著者を通しては殊の外この事を痛感させられた。

それらは本書の中でも十分に役目を果たしていることに気付くのである。ちなみに、著者は労研図書館長を兼任しておら

れた時期があり、労働衛生に関する新しいことや歴史に関することなど、折にふれては教えていただきたいことが多かったことを、年を経るにつれてしきりに思うのである。

また、本書には資料中にあるその時代の産業現場のさし絵など数多くみられ、興味を持って理解を深めることが出来る。その他、最近著者が現地で撮影されたという古代ローマの水道橋アーチ、ポンペイの街のかつての貯水槽（鉛の水槽の痕跡がある由）、ポンペイの歩道わきの水道鉛管等々（本書四頁・五頁）著者の今なお壮^{さか}んな探求心には驚く他はない。

一卷から七巻まで、連続物ではあるが、各巻それぞれ単独で読んでも一向に差支えない。このあと必ずや八巻あるいは九巻と続くものと思われる。著者に訊いてみたい気もするが、それは野暮と言うべきか。

（保坂 捷子）

〔労働科学研究所出版部、川崎市宮前区菅生二一八一—四、電話〇四四一九七七一—二二二一、一九九二年、A五判、二五〇頁、定価四五〇〇円〕

シャーウィン・B・ヌーランド著、曾田能宗訳

『医学をきざいた人びと』上下二巻

S・B・ヌーランドの『医学をきざいた人びと』上下二巻は、ヒツポクラテス、ガレノス、ヴェサリウス、パレ、ハーヴェー、モルガーニ、ハンター、ラエネック、ゼンメルヴァ

イス、麻酔、フィルヒョウ、リスター、ジョンズ・ホプキンズ大学及び臓器移植の各章から成り立っている。

著者はエール大学の外科医師で、学生を指導するかたわら、大学医学史図書館に通い、臨床医としてだけでも知っているべき医史を徹底的に研究した。本書は著者の鋭い視点から捉えた医学史で、ヒツポクラテスから現在に至るまでの一貫した医療と医療の見方と、これに取り組む意欲が示されている。単に事実を記述するだけでなく、その時代の背景に深い洞察力を加え、史的事実を過去のこと、同時代のことだけでなく、未来のこと、すなわち後年実際になされたこととの比較にまで言及している。ヴェサリウスの『ファブリカ』、ハーヴェーの『心臓と血液の運動』、モルガーニの『病気の座と原因』、フィルヒョーの『細胞病理学』が十六世紀以降の四大医書として高く評価され、千五百年に及んだガレノス説が崩壊した過程がよく描写されている。ヴェサリウスとカルカールによる科学と美術の融合である『ファブリカ』の章にはレオナルド・ダ・ヴィンチも登場すれば、三百年以上も後に発刊された『グレイの解剖書』も登場する。

外科技術に対する影響について、著者はパレ以前にはヒツポクラテスしかおらず、パレ以後にはJハンターしかいないと決めつけ、戦場での戦傷を、雷と大砲の差に譬えている。

当時の理髪外科医の地位を内科医とならぶ地位に高めることができたのは、パレの思いやり、正直さ、優しさ、好奇心、誠実さの人間の思想と結論づけている。第一次世界大戦で進